
pure sky

sora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

pure sky

【コード】

N1585W

【作者名】

sora

【あらすじ】

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島で生まれ育った、お母さんを亡くした美空。

美空の空には、いつも霧がかかっています。

そんな美空の前に現れた、「空」という名前の男の子。

空は、少しずつ美空の空の霧をはらっていきます。

自分の霧をはらってくれる空に、美空は次第に惹かれていきます。

でも、空には本土に残して来た大切な彼女がいて……。

そして、小さいころから美空を想い続けてきた幼馴染の竜登も動きだして・・・。

美空の初恋、竜登の想い。

そして空の好きな人・・・。

動きだす3人の恋。

それに空の複雑な家庭の事情も絡んできて・・・。

第1話 始まりは突然に

美しい空、美空。これが私の名前。
でも、私の空にはいつも霧がかかっている。
空、君に会うまでは……。

ここは、瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。
島民およそ200人。
本当は何々島っていう名前がある……はずなんだけど、ここに住んでる人達は皆この事を島って呼ぶ。
だからかな？私は中2になった今でもこの島の名前を知らない。まあ、それ自体どうでもいいんだけどね。

島は、晴れているとても空が綺麗だ。
美しい空。美空。こんな名前がぴったり。
ちなみに私の名前も美空。
でも、私の空にはいつも霧がかかっている。
それはきつと、お母さんが死んだ時くらいから……。

「みいちゃん」
「あつ、田中さん」
この島では皆顔見知り。
すれ違う人すれ違う人、皆が私を呼び止める。
別にそれが嫌なんじゃない。こんな捻くれた私でも、それをむしろありがたいと思う。
この島に生まれ育った私達にとって、道を歩いていたら呼び止めるのが当たり前。呼び止められない悲しさは、本土に行けばよく

分かる。だから、この島の人はほとんどの人が一生この島で暮らす。きっと、私も一生この島で過ごすんだらうなあって思う。当たり前のように、この島で、一生……。

ねえ、空。きっと、この時の私には、この島で一生過ごすのがどれくらい難かしいか、分かって無かったんだね。大好きなこの島で、一生……。3人で……。

「あのね、今度、島に引越してくる人がいるんだって」

「えっ？ほんとですか？珍しいですね」

「ええ、本当に珍しいわよね」

島に人が引越してくるなんて、何年ぶりだろう？

うーん、9年ぶりくらいかなあ？

「それでね、引越してくる方のお子さんがみいちちゃんくらいの年頃なんだって。竜君以外の同級生ができちゃうかもね」

「竜以外の同級生ですか……。ちよつと想像できませんね」

竜というのは、島で唯一の私の同級生。本名は竜登。

島で私がみいって呼ばれているように、竜登も竜って呼ばれてる。

もちろん私も竜って呼んでる。

にしても、竜以外の同級生か……。

まっ、にしてもまだ同級生かどうかも分からないんだけど……。

「ああ。みいちちゃん、ごめんね。今日はあと3軒くらい回らなくちや」

「はい。頑張つて下さいね」

島の女の人で仕事をしてない人のほとんどが、こうやって週に4、5回くらいおじいちゃんおばあちゃんの家を回る。って言っても島に独立してる人なんていない。皆が家族みたいな関係。約200人の大家族。その中に、近く同じくらいの年の人がやってくる。人見知りな私は、新しい家族を受け入れられるかなあ？そんな事を思いながらも、同級生だったらいいな、なんて考える。だって、私は竜

以外の同じ年の人を知らない。たった1人も。

空、不安を抱えながら、期待も感じる。これが、君が島に来る前の私の様子でした。

第1話 始まりは突然に（後書き）

pure skyを読んで下さってありがとうございます。

pure skyは、まだまだ続きます。

予定では物凄く長くなる予定です、最後まで読んで頂ければ嬉しいです。

この小説についてですが、大体1話2000文字くらいで書いています。

これからもそうしていく予定です。

2000文字くらいで書いているのは、見つけて下さった方も、2000文字くらいなら読んで頂き易いかな？という勝手な想像からです。

ちよつと意味分らないですよね（笑）

自分でもあまり分かりません（笑）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

2話以降も読んで下されば、とてもうれしいです。

第2話 その時君は？（前書き）

「前回までのあらすじ」

瀬戸内海に浮かぶ小さな島。

その島に転校生が来る事に！

島で生まれ育った美空は、その前夜、転校生と馴染めるかどきどき

しながらも本土の人が来る事にわくわくしていました。

そしていよいよ転校生が島に！

美空は転校生に馴染めるでしょうか・・・？

第2話 その時君は？

空が転校してきたあの日……。
あの日、竜はなにを思ってたの？
ねえ、竜、教えてよ……。

「おはよー。今日は転校生を紹介するぞ！」

島の中学校の校長先生が言った。

この島の学校は、幼稚園兼の小学校、中学校の2校だけ。だから校長先生が授業なんて珍しくない。って言っても人口約200人の島に幼稚園も小学校も中学校もあるなんて驚沢だと思っ。

まあ人口約200に相应しく、この高台中学校には生徒が7人しかない。あつ、今日から8人になるんだけど……。

そして、こんなに狭い島だ。私達が転校生を見ていない訳が無い。

転校生は、背の高くって大人っぽい、たぶん3年生の男の子。っていうか、中学生って信じられないほど大人っぽい。同級生っぽくないのは残念だけど、どうせ中学生と一緒に授業受けるんだしね。学年は大して関係ないや。

「ほら、三浦空！入って来い」

がらつ。さつき見た大人っぽい男の子が入ってきた。

「三浦空です。東京から引越して来ました。これからよろしくお願
いします」

「三浦空は14歳だ。学年は2年。竜とみいと一緒だな」

えっ？あんなに大人っぽいのに中3！？しかも空ってなんか名前かぶってる……。

「えーと、竜とみい？よろしく！」

「あつ、よろしく」

竜と声を合わせて言う。

「空は何で引越して来たんだ？」

竜が聞いている。

「えっ？……。まあ、色々あつて……」

「へえ……。まあいいや」

「とつ、ところで、みいつて本当は何ていう名前なの？」

えっ？いきなり話題ふる？

「みつ、美空」

「へえー、何か名前かぶってるね（笑）」

「うん。私もそう思った！」

「なあなあ、空はさ、村長に何て言われた？」

竜が急に入ってくる。

「ああ、何か色々。島にきてくれて嬉し……」

「そうじゃなくてっ！何て呼ばれた？」

「そういう意味か。くうって呼ばれたよ」

「じゃあくう！今日歓迎会しようぜ！なっ、みい」

空に続いて竜まで突然話題をふってくる。

「うん。いいよ。島の綺麗な場所に連れてってあげる」

「さんきゅー！」

「じゃあ今日の7時にみいの家で」

「分かった」

こうして私達は空の歓迎会をする事になった。

空。今思えば、あの時から君に惹かれていたのかもね。

あの日、君が始めて空の霧をはらってくれた時から……。

第2話 その時君は？（後書き）

第2話を読んで下さってありがとうございます。

1話の時に2000文字くらいで書くて書いたくせに、それをいきなり破ってしまいました。すみません。
やっぱり思いどおりになりませんでした。

ここまで読んで下さってありがとうございます。
よければ感想等聞かせて下さい。

第3話 始まりの予感 part 1 (前書き)

「前回までのあらすじー
瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島の中学校。
全校生徒7人の島の中学校に、転校生がやって来ました。
転校生の名前は三浦空。
空は島に馴染めるでしょうか・・・？」

第3話 始まりの予感 part 1

「みいー！みいー！」
竜が私を呼ぶ。

「はい、ちよつと待つてー」
外に出る。

「ごめん、お待たせ」

「んっ？くうはまだ来てないか・・・」

「うん。まだ来てないよ。それより、どうしたの？こんなに早く来て。いつもは遅れて来るのに・・・」

「いや、今日くらい早くくるたる！」

「・・・いつも早く来てよ」

私の言葉を、竜が笑って誤魔化した。

「竜、美空！」

竜を庇う様に、空が家に来た。

「島にチャイムつてないの？」

空が誰ともなく言った。

「チャイム？何だそれ」

それに竜が答える。

「んっ？チャイムを知らないの？」

んー、私もチャイムなんて聞いた事がない・・・。

なんて思っている、

「美空も知らないの？」

空に聞かれた。

「うん。知らない」

多分本土にある物なんだと思う。

でも、本土にあって島に無い物なんて珍しくないし・・・。

「まっ、そんな事気にしてないで、さっさと行こうぜ」

竜が開き直った様に言う。
そして、私達は「出かける」事になった。

「……ら、美空っ！」

「は、はい」

「どうしたの？ ぼーっとして」

空に呼ばれて気が付いた。

実はこの辺りは、お母さんが死んだかも知れない場所。

なんとなく、竜にも言えていないけど……。

「ううん、何でもないよ」

「……」

空があまり納得していない顔で、でも、追求するのをやめてくれた

から、私は少し安心した。

にしても、竜が空に見せたかった場所ってここだったんだ……。

てっきり「あそこ」かと思ってたんだけど。

竜が空を「あそこ」に連れて行く事は、結局1度もなかった。

なんで「あそこ」に空を連れて行かないか聞いていたら、もう少し

早く気が付いたかもしれないのに……。

もう少し、竜を傷つけなかったのに……。

今後悔しても、もう遅い。

だって、だって竜は……。

第3話 始まりの予感 part 1 (後書き)

第3話を読んで下さってありがとうございます。

今回はかなり短くなってしまいました。

3人で出かけるシーンを、どうしても2話に跨がせて書きたかったです。

だからって言うても短かすぎるんですけどね・・・(笑)

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

第4話 始まりの予感 part 2 (前書き)

「前回までのあらすじー
瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。
その島に住む、美空と竜登、そして転校生の空。
3人が遊びに行っている場所は、美空のお母さんが死んだかもしれ
ない場所でした・・・。
それを知らない竜登と、美空の隠し事に気が付いた空。3人の関係
が、大きく変わり始めます。」

第4話 始まりの予感 part 2

「おおー！夕日ー！」

空が叫ぶ様に言った。

「本土では夕日も見えないのか？」
竜が聞く。

「ああ、あんまり見えない。東京の空は灰色だったから・・・」
空が思い出した様に言う。

「へえ、じゃあ島の方がいいね」

何故だか、急にそう言たくなった。

「うん。そう・・・だね」

空が、少し迷った様に言う。

私は断然島の方がいいのにな・・・。

まあ、小学生みたいにこの島が世界中の中心だー！なんて思わないけど・・・、やっぱりこの島はいいのにな・・・。

空には、本土に何か未練があるのかな？

なんて思っていると、急に竜が喋り出した。

竜は昔から、急に喋りだす事が多い。

「っていうか、くうって東京に住んでたんだな。首都じゃん！」

「そっだよ」

首都、東京・・・。

将来行く事があるのかな・・・？

ううん。多分ないだろうな・・・。

空の家はどんな家だったんだろう？きっとチャイムがある、素敵な家なんだろうな・・・。

「・・・行ってみたい」

「えっ？」

空と竜が声を合わせて言った。

あっ、心の声が漏れたっ。

恥ずかしいっ。

「みいは・・・、東京に行きたいのか・・・？」

「っ。竜の声から、少し傷ついている様な響きを感じ取る。

こういう時、幼馴染って損だね。どれだけ上手く隠そうとしても、

絶対相手に気付かれちゃう。

「ちっ、違うっ。東京じゃなくて、空の家だよっ。行ってみたいな

あーって思もって・・・」

今度は、なぜか空が傷ついた顔をした。

「・・・」

3人の間に、気不味い空気が流れる・・・。

「えーっと、じゃあそろそろ帰る・・・かつ？」

この空気に耐えかねた竜が切り出した。

「うん。そうだね」

空もあっさり同意。

私はもう少しいたかったな・・・。

少し未練を残しつつ、私はおとなしく帰途についた。

途中で竜と別れて空と2人きりになった後も、なんとなく気不味い

空気を引きずったままで歩いてた。

でも、空が何かを決心して様に口を開いた。

「なあ、美空。さっき何か隠しただろ？」

空が私の顔を覗きこむ。

「何にもないよ」

言ながら、つい顔を逸らしてしまう。

でも、空は黙ったまま私から視線を外さない。

そして、つい言ってしまった。

「お母さんが、お母さ……んが……」

空は、私にお母さんがいない事知ってるんだ……。

「大丈夫」

そう言ながら、私の頭を撫でてくれた。

子供みたいにしゃくり上げながら、いつまでも泣いた、あの日。
あの日、君に恋をした。

第4話 始まりの予感 part 2 (後書き)

第4話、読んでくださってありがとうございます。
できました、憧れの part 2
ほんとにありがとうございます。

これを読んで下さっている方から、「3人の苗字教えて」という御意見を頂いたので、ここに載せさせていただきますと思います。

みい・・・佐藤 美空

くう・・・三浦 空

竜・・・島中 竜登

です。そういえば、苗字でできたのって空だけでしたよね。

美空と竜登すっかり忘れてました(笑)

竜登は基本竜ですし、1番名前いらぬ人ですね。

ではこの辺りで・・・。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

第5話 美空の過去（前書き）

―前回までのあらすじ―

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む幼馴染の美空と竜登は転校生の空と仲良くなる為に、

3人で遊ぶ事にしました。

空と話しをするうちに、空の過去を知りたいと思うようになる美空・
・・。

そして美空の想いに気が付き始め、複雑な想いを抱く竜登・
・・。

美空の過去に気が付いた空・
・・。

3人の関係が、大きく動き始めました。

第5話 美空の過去

「美空……、いいよ、無理しなくて」

そっぴいなながら、空が私を撫でる手を下に下ろす。

「……いいの、空に聞いてもらいたい」

竜にも隠してきた、お母さんの事……。

本当は誰にも言いたくない筈なんだ。

だけど、なんでだろう？

今は空に話たいて思う。心から。

空が私に気が付いてくれたからかな？

それとも……。

複雑な思いを胸に抱きながら、静かに静かに話し始める。

私の過去。空の霧の理由。お母さんの話……。

「私のお母さんはね、お医者さんだったんだよ。島で唯一のお医者さん。子供の時からすっごく頭が良くて、将来大物になるって島中の人から期待されてたんだって。留学の話も出てたらしい。でも、お母さんはこの島が大好きだった。だから、島の人達の助けになる仕事をしたかったんだって。で、島は医者不足でしょう？だから、小学生の時からお医者さんになるのが夢だったんだって」

空は、凄く真剣に私の話を聞いてくれた。

時々、うん、うんって頷きながら。

「だからね、お母さんは中学生の時に島を出て本土の学校に行った。そのまま高校に行って、大学に行って……。本当に医師免許を取っちゃった。医師免許を取って島に帰ってきた」

この話をする時、私はいつも誇らしくなる。

私のお母さんは、こんなに凄い人なんだよって。本当に島の事を想ってるんだよって。

「島に帰って来たお母さんは、幼馴染で2歳年上で幼馴染の男の人のお父さんと結婚した。そして、2人で診療所を始めたの。島の人は皆歓んだよ。島にお医者さんが来てくれた！って」
空は相変わらず真剣に聞いてくれている。

本当に優しいな、空は・・・。
ふとそんな事を思ってしまった。

「島にお母さんが帰って来たのに合わせる様に、島中さんー竜のお母さんが妊娠した。その時お腹にいたのが、輝君だったの。って、空は知らないか。輝君は竜のお兄ちゃんなの。本名は島中竜輝しまなかりゅうき。今は本土の高校に通ってるよ」

輝君、懐かしいなあー。

そういえば最近会ってない。元気かなあ？
今度竜に聞いてみよう。

「その処置とか、対応が完璧だったらしいの。島の人にも凄く信用されて、大して病気でもないのに診療所に来る人までいたんだって」
ここまで話して、私は少し躊躇った。

空は、私の躊躇いに気が付いたんだと思う。
急に、

「じゃあ、続きはまた今度聞かせて」
そう言って、帰ろうとした。

空の気遣いが分からない程小さい訳でもないし、ここまで話して躊躇ったのも本当。

でも、何故か聞いてほしかった。

自分でも可笑しいと思うけど、何故か聞いてほしかった。
帰ろうとする空に、私はまた、お母さんの話を始めた。

「それから暫くして、また島中さんが身籠った。でも、今回はお母さんも妊娠してしまった。お母さんは、断ったらしい。そして、2人で本土で産もう。って島中さんに言ったんだって。でも島中さん

も島の人も、大丈夫お母さんならできるって、2人で島で産もうつて言った。お母さんも断りきれなくて……。で、竜が産まれる時お母さんに悪阻がきちゃったの。無事に産めたけど、お母さんは無理して体壊しちゃって……。だから、お母さんから生まれて来た私は体が弱かったの。お母さん、それをすごく気にしてて……。どちらにせよ、もうお医者さんはできないくらい体が悪くて、1日中家にはいたんだけど……。とにかく、私が風邪でもひいたら大騒ぎ！もう1日中付きっ切り。お母さんも体が弱いのに、無理してずーっと起きてるの」

「……少し間を空ける。」

「これからいよいよ、本当に……。」

「ううん、私が決めた事だから。空に話すって……。」

「私ね、小4年の時、肺炎にかかったの。お母さんは本当にずーつと付きっ切りで……。元々お母さんも体弱いから、お母さんも体壊しちゃって……。なのに私の看病をやめなかった」

「また少し間を空ける。」

「そんなお母さんを見て、お父さんは気晴らしになればって買い物頼んだ」

「今度は長い間を空ける。」

「……そしたら、疲れきったお母さんはさつき行ったあの崖から落ちたんだ、たぶん。あんまり詳しい事は分からないんだけど、たぶんあそこだろうって……。買い物袋も近くに落ちてたらしいよ。」

「……」

「……話し終わった。」

「とうとう空に話してしまった。」

「何かすつきりした気分。」

「でも、瞳には涙が溜まってる。視界が霞む。」

「そんな私を、」

「大丈夫、美空の嵯峨じゃないよ」

「って言いながら、いつまでもいつまでも、空は優しく私の傍にいて」

くれた。

第5話 美空の過去（後書き）

第5話、読んで下さってありがとうございます。
わりあい重い話になってしまいました。
苦手です、こつこつ話。

ルビに関してなんですが、ルビって携帯から見るとすごく読みにくいですね。

こないだ友達に見せてもらって初めて知りました。

というわけで、すごく勝手なんですが、ルビを振るのは間違えやすい漢字だけにしました。

パソコンから見て下さっている方、申し訳ありません。

うーん、でも、これ見て下さってる方ってほとんどブログで知り合った方ばかりですよね。

じゃあ皆さん携帯から見て下さってるのかな？

まあ私が把握している方は皆さん携帯持ってますね。

結局パソコンで見る（携帯持ってない）のは私だけって落ちですか・・・。

・・・携帯欲しい。

以上、s o r r aの呟きでした。（スルーして下さい）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

番外編 空色飛行機

「カシヤツ」

飛行機を見つけたら、手で四角形をつくる。

その四角形の中に飛行機を写して、カシヤツつと言っ。

大好きな大好きな空君、貴方に逢う為のおまじない。

貴方に出逢ったのは8年前。

まだ5歳の時。

俗に言う「お金持ち」の家で生まれ育った私には、5歳の時から許婚がいた。

天宮空君。

それが貴方。

嫌だった。

いつか王子様が迎えに来てくれるって信じてた私は、空君を見て、

開口1番

「王子様じゃない。優里菜、王子様と結婚するの!」
って言ったよね。

今では、私の王子様は空君だけだよ。

友達に言っつと、

「優里菜は夢見る少女だね」

って笑われちゃうけど・・・。

「王子様じゃない。優里菜、王子様と結婚するの!」

5歳の少女が、子供らしい無邪気な様子でそう叫んだ。

5歳の少女―宮下優里菜の母親は、このままでは折角のお見合い話が！とでも言うかのように

「優里菜、空君は世界1の王子様なのよ」

と、ある事無い事ひっくり返るめて優里菜を宥め様とした。

まあ、「空君」が世界1の王子様である、というのは満更嘘とも言いきれないが……。

「空君」は、世界1の大金持ちとさえ噂される「天宮」の1人養息。

「天宮」の莫大な遺産を継ぐであろう、唯一の遺産相続人なのだ。

優里菜の母が、必死になつて優里菜と結婚させようとするほどの王子様である事に間違いはない。

ただ、もし「天宮」の正式な息子ができてしまえば、その立場は一揆に危ういものになる。

もしかすると、命を狙われるかもしれない。

まあ、簡単に言つと、養子なのだ。

といつても、「天宮」の1番若い者でもう62歳。

とても子供を産める様な年齢ではない事は、誰の目からも分かる事だろう。

「空君」こそ、もう確定事項として決まっている、天宮家の正式な遺産相続人だ。

4歳の時に両親を亡くし、遠い親戚にあたる天宮家にひきとられた。ややこしい身の上にある事も1つに、とても大人びた「空君」。

天宮家の遺産相続人としても、人としても文句の付け所がないくらい完璧に育つた「空君」と結婚できるのならば、宮下家にとつても優里菜にとつても利益になる。というのが優里菜の母の考えだった。それも、優里菜の意見はなしにして、の話だったが……。

「宮下優里菜です。空様の婚約者候補として、天宮様には日頃からよくして頂き、とても言葉では言い表せない程感謝させていただいております」

お母様に言わされただけの台詞。

これが天宮家の大老に気に入られた理由だった。

私を気に入って下さった大老は、他の婚約者候補達をすぐに返した。この瞬間から今まで、そしてこれから先も、私は空君の許婚になった。

中々仲良くなれなかった。

空君は私には大人っぽすぎたし、2人とも割合人見知りな方だった。いつまでも、必要最低限の会話。

それでもいつしか、空君と2人の空間を愛しく想う様になった。

何故か、理解しあえる関係になってきた。

そう思い始めたある日の事だった。

「優里菜さん、僕といて楽しいですか？」

「えっ？」

始めは意味が分からなかった。

序所に、ああ、空様は私との距離を不快に思ってたんだな、って気が付いたけど……。

「はい、もちろんです。私は空様をお慕いしております」

咄嗟に口をついたのは、お母様に教え込まれた空様に対する言葉ばかり。

「……あの、よろしければ、優里菜と呼ばせて頂いてもよろしいですか……？」

「はい、喜んで」

「では、あの……、優里菜」

「はい、空様」

「空、でいいです」

「はい、空君」

たどたどしい会話。

当時7歳の私達は、お互いに他人行儀で……。でも、少しづつ近づく心の距離に、心地よさを感じていた。

その内、私達は完全に打ち解けた。

今は、空君が……。空君だけが、私の王子様だよ。

でも、毎日会っていた8年間が終わりを告げた。

空君が、瀬戸内海の小さな島に行く事になった。

理由は……。分からない。

子供の私達は、まだあまりに幼なすぎて……。ただ、時の流れを待つ事しかできない。

別れ際に言ってくれた、

「好きだよ。いつまでも、優里菜は俺の許婚だから」

って言葉を信じて待ってる。

ずっと待ってるよ。

「カシャッ」

1日10回飛行機を撮れたら願いが叶う。

もし10回撮れたら、お願いする事は1つだけ……。

「空君に逢いに行けますように。」

ずっとずっと、一緒にいれますように。」

空に願うよ。

貴方に逢いたい。

いつも、貴方を想ってる……。

番外編 空色飛行機（後書き）

番外編、読んで下さってありがとうございます。

優里菜が誰なのか、「天宮」空が誰なのか。

それは後々本編で書いていきます。

番外編、ちょっと書くの早かったかな？

もう少し・・・、本編で優里菜が出てきてからくらいに書く予定だったんですが、ちょっと焦って書いてしまいました・・・。

何かちょっと謎の話になっちゃいましたが、深く考えず、ただ普通の1話で完結の話として読んで下されば幸いです。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

第6話 愛しい日々（前書き）

―前回までのあらすじ―

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む美空と竜登、転校生の空。

3人で過ごす内に、空の事を知りたいと思う様になる美空。

美空の気持ちに複雑な想いを抱く竜登。

美空の過去を聞いた空。

3人の関係が、大きく動き始めました。

第6話 愛しい日々

空が好き……。

私は、この事に気が付くのが遅すぎた。

もう戻らない愛しい日々。

君と過ごした季節……。

ね？ 竜……。

朝、いつもより早く起きた。

いつもより早めに待ち合わせ場所に行く。

空は……、まだ来ていない。

ねえ、空。

昨日、私の話を聞きながら何を思ってた？

何を考えていた？

そんな事ばかり考える。

3人の待ち合わせ場所。

私と、空、竜の3人の……。

でも、今朝私が待っているのは、多分空だけ。

空の事が気になる。

何で？

だって昨日、私の過去を話したんだもん。

包み隠さず、全部。正直に。

この時の私は、本気でそう思ってた。

夢にも、空が好き、なんて思っていなかった・・・。
私はバカだね。

でも・・・、もう少し早く気が付いていれば、何かが変わった？
大好きな竜と、もう少し早く向き合えた？
優里菜とも向き合えた？

答えは、NO。

結局こうなっていたと思う。

なら、私は後悔しない。

だって、後悔したって何も変わらないから。

竜は、そんな事望んでいないから。

これも、空、君が教えてくれたんだよ。

ねえ、空。

君に出逢って私は変わった。

始まりは、きつとあの時。

君に恋したあの瞬間・・・。

「美空！おはよー」

「・・・おはよう、空」

「今日は早いね」

「でしょ？早起きしたの」

「偉い偉い」

そう言いながら頭を撫でてくれる。

嬉しかったけど、素直じゃない私は、

「・・・？子供扱い？」

なんて、可愛くない事を言う。

「あつ、みい。明日から1回東京に帰るから。しばらく2人で学校
行って」

あれ？空、何か嬉しそう・・・？

「分かった・・・」

「ああ、よろしく」

「・・・竜、遅いね」

「うん。まっ、いつもの事だろ？」

「そうだね」

「みいー！くうー！悪い、遅れた」

そう言っているのと、竜が来た。

「遅い！」

空と声を合わせて言う。

「遅刻する。行くぞ」

竜が言う。

「・・・誰のせいやねん！」

空が言った。

竜が走りながら、

「何で大阪弁やねん（笑）」

と突っ込みを入れる。

そんな2人に、

「ちよっ、ほんまに遅刻すんでー」

と大阪弁で突っ込みを入れ、私達はそろそろ本気で走り出した。

第6話 愛しい日々（後書き）

第6話、読んで下さってありがとうございます。
少し短めになってしまいました。

次から、空は暫く本土に帰っていない予定です。

空の事と島の事と平行して書こうかなって思ってるんですが、皆様
のご意見お待ちしています。

自分で決められません（笑）

「未来へ・・・」連載開始しました。

11月中旬に完結させようと思っています。

よければこちらも見て下さい。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

第7話 島と東京（前書き）

―前回までのあらすじ―

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む美空と竜登、転校生の空。

すっかり打ち解けた3人。

でも、空が本土に帰る事に。

島の2人と本土の空。

それぞれの物語が始まりました。

第7話 島と東京

空のいない1ヶ月が始まった……。

「みい！」

「竜、おはよー。早いね」

「だって、くう居なかつたらみいずっと1人で待ってなきゃ駄目だから……」

「いや、空が来る前はずっと1人で待ってましたよ？」

「それはノーカン」

こんな事を言いながら、竜の気遣いが嬉しい。

確かに空がいないと寂しかったし……。

「よしっ、じゃあ早めに学校行くぞ」

「久し振りに走らずに学校に行けるね」

私の言葉に、竜は笑って誤魔化した。

「おはよー！今日は早いね」

1つ年上で3年生の愛香ちゃんが言った。

「でしょ？珍しく竜が早く来てくれたの！」

「竜、いつも早くこなきゃ駄目でしょ？」

愛香ちゃんが竜に言う。

「愛香だって、いつも私を待たせるでしょ？」

愛香ちゃんの双子の妹、愛美ちゃんと言う。

「愛美ー、お姉ちゃんはおっと敬いなさい？」

「どっちかと言うと、お姉ちゃんはお私でしょ？」

「えー、あたしの方が早く生まれてきたよ？」

「だから、性格的にはって事」

愛香ちゃんと愛美ちゃんの姉妹喧嘩は、島の名物となりつつある)

笑)

『キーンコーンカーンコーン』
チャイムが鳴った。

「空君っ！」

「優里菜っ！」

東京都羽田空港。

午後の便で東京に帰って来た俺を、許婚の優里菜が迎えてくれる。
許婚で、小さい頃から決まっていた結婚。

それでも、俺は優里菜を好きになった。

「優里菜様っ。走ってはいけません。転びますよ」

言われた瞬間、優里菜が躓いた。

「優里菜っ」

転びそうになった優里菜を支える。

「学校は？」

そしていきなり現実的な質問を投げかける。

島の青空は、俺の過去を聞かない。

でも、東京の灰色に空は、俺を現実に引き戻す。

「休んできた」

屈託無い笑顔で答える優里菜。

優里菜の笑顔を見る度に、青空を思い出す。

その青空は、どこか島の青空に似ていて……。

そんな優里菜の笑顔が好きだ。

荒んだ俺の空を真っ白に洗い流してくれる、優里菜のこの笑顔が……。

「駄目だろ？どうせすぐに会えるのに……」

「だって……」

中2になっても、優里菜の笑顔は変わらない。

いつでも俺を綺麗にしてくれる、婚約者の優里菜。

離れていても変わらない、俺の気持ち。

島は、俺を癒してくれた。

それでも、優里菜のいるこの東京が、俺の故郷だから。

嫌な思い出もあって、縛りもきつい。

でも、優里菜がいるなら・・・、東京も悪くないって思う。

優里菜は凄い。

笑顔だけで、人を元気にできるから・・・。

第7話 島と東京（後書き）

第7話、読んで下さってありがとうございます。

島の美空と東京の空。

暫くはこの構成でいこうと思っています。

読みにくいかもしれませんが、基本1人称が「私」であれば美空、「俺」であれば空。という風に見分けて頂けば間違いないと思います。

空が東京に行っている1ヶ月は、そこまで続けようと思っていないので、割合すぐ終わるかもしれません。気まぐれな作者ですみません……。

ここまで読んで下さってありがとうございます。よければ感想等聞かせて下さい。

第8話 竜登と愛美（前書き）

―前回までのあらすじ―

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む美空と竜登、転校生の空。

すっかり打ち解けた3人。

でも、空が本土に帰る事に。

島の2人と本土の空。

それぞれの物語が始まりました。

第8話 竜登と愛美

みい。

島での・・・、ニツクネームみたいな物・・・。

島でどう呼ばれるかは、生まれた時、もしくは島に引っ越してきた時に決まる。

始めて村長さんに会った時に、どう呼ばれるかで決まる。

でも、この制度・・・？みたいな物は、今の村長さんの代から始まった。

だから、今の3年生ー私達より1つ年上の愛香ちゃんや愛美ちゃん、2人より年上の人達には、その名前がない。

例外は輝君だ。

竜のお兄ちゃんの輝君は、村長さんの息子。

村長さんは輝君の事を、生まれた時から輝と呼んでいたらしい。

そして自分が村長になった時に、島民は皆自分の子供も同然、と言って名前を付ける様になった・・・。

という事だと、島の人は言っている。

そして、輝君と竜以外でその名前を1番に付けて貰ったのが私ーみい。

その私を、島で唯一みいと呼ばない空。

君に抱く不思議な気持ち・・・。

これは何だろう？

こう思っていた私に教えてあげたい。

それは・・・、「恋」なんだよって・・・。

「美空」

ふと、竜がそう呟いた。

「竜？どうしたの？」

空以外に始めて美空と呼ばれた。

その事にびっくりして、無駄に高い声が出てしまう。

「いや、なんでもない」

竜の声が、少し思いつめた様に響く。

「竜、最近どうしたの？なんかおかしいよ？」

空が本土に行ってから2週間。

最近、竜の様子がおかしい。

いつもぼーっとしていて、思いつめた様な……、迷っている様な瞳めをしている。

でも、どうしたの？と聞くと、いつも、

「なんでもない」

と答える。

ほんと、どうしたんだろう……。

行き帰りのこの道で、空の居なかった時の様に2人で歩く。

最初は寂しいと思っていたけど、2週間も経てば以外にどうでもよくなってしまう。

そんな事を思っていると、学校についた。

お昼のお弁当の時間。

「竜？りゅーうー！」

どこを探しても竜がいない。

この学校、無駄に大きいなあ。と思いながら、竜を探す。

「愛美ー。あーいーみー！」

前から、愛香ちゃんがやって来た。

「ねえ、みい。愛美見なかった？」

愛香ちゃんが少し苛立っている様に言う。

「見なかったよ。竜見なかった？」

「えっ？竜もいないの？」

愛香ちゃんが不思議風に聞く。

「うん」

私が答えると、

「まったく……。2人して何処言ったんだか……」

何故かおじさんっぽい発言。

そして、

「まあいつか。教室で待ってよーっと」

あっさりと諦めて帰っていった。

「みいもおいでー」

教室で愛香ちゃんが叫んでいたけど、

「屋上だけ行って見るー！」

そう叫んで屋上に向かった。

ほんとは、竜が屋上にいるなんて思っていなかった。

屋上にいるのは……。いつも空。

ちよっと空に会いに行こう。って思いながら屋上に向かったんだ……。

「……が……本土……」

あれ？

愛美ちゃんの声が聞こえる。

って事は2人で屋上に？

そう思っていると、2人の姿が見えた。

「……みい……てる」

声を掛けようとして、思わずやめた。

竜が、私の名前を言ったからだ。

なんの話をしているんだろう？

駄目だつて分かっているけど、思わず聞き耳を立てる。

「……でしよう？それでいいの？」

愛美ちゃんの声が、はっきり聞こえる距離で聞き耳を立て始めた。

「そんな事言つたつて。みいはくうの事が……！」

竜が語尾を荒げる。

えっ？

何の話？

「でも、竜はみいの事が好きなんでしょう？何で……」

「！？」

頭に鈍い衝撃が走る。

竜が……？私を……？

「好きだよ！でもみいは……、くうが好きなんだよっ！」

竜が叫ぶ様に言う。

えっ？

私が空を……？好き？

「ねえ、竜。竜がみいの事好きなの、知ってるよ……？」

愛美ちゃんが静かな声で言い始める。

竜は口を挟まない。

「でも……、私は、竜の事が好き。ずっとずっと好きなの……」

「！？」

いつも冷静な愛美ちゃん。

その愛美ちゃんが、竜に告白！？

つていうか、竜の事好きだったんだ……。

竜も驚いた様に立ち竦んでいる。

そんな時……、

「みい！？」

愛美ちゃんが私を見つけた。

・・・最悪。

「えっと、竜とお弁当食べようと思って・・・、それで・・・」
竜も驚いた顔をして私を見ている。

もう、駄目・・・。

誤魔化せない。

「・・・ごめんっ」

そう言って、走って教室に帰った。

第8話 竜登と愛美（後書き）

第8話、読んで下さってありがとうございます。

告白大会みたいな感じになってしまいました・・・（笑）

色々物語が動きましたが、今話でやっと島の名前の説明が出来ました。

やったー！

「未来へ・・・」も完結して、今は「pure sky」一筋（笑）で書いています。

久し振りの更新になってしまいました・・・。

今テスト期間なんです。

その関係もあって、今週中は更新出来ないと思いますが、気長にお付き合い下さい。

すみません・・・。

では・・・。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

第9話 島民達の恋模様（前書き）

―前回までのあらすじ―

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む美空と竜登、転校生の空。

すっかり打ち解けた3人。

でも、空が本土に帰る事に。

島では、何やら複雑な三角関係が始まって・・・!?

島の2人と本土の空。

そして、愛美・・・。

それぞれの物語が始まりました。

第9話 島民達の恋模様

何が起こっているのか分からない……。

竜が私を好きで……、愛美ちゃんが竜を好き？

何で今まで気が付かなかったんだろう……。

竜の気持ちにも、愛美ちゃんの気持ちにも……。

それと、もう1つ。

私が……、空を好き？

もちろん、空の事は好きだ。

でも、多分2人が言っているのは恋愛の意味。

正直……、絶対違うと言いたい切れない。

空には、今まで誰にも感じた事のない気持ちを感じる。

出会ったばかりなのにお母さんの話をしてしまったのも……空の事が好きだから？

1人で帰る寂しい帰路。

赤く染まり始めた空を見ながら、私は静かに1人で歩く……。

隣に、君がいない寂しさを噛み締めながら……。

「みい」

外から声がする。

誰かなんて、見なくても分かる。

生まれた時からずっと一緒にいるから。

私の唯一の同級生（今は空もいるね）だから。

「竜……」

いつもの様に窓から外に出る。

「みい。あの話・・・、聞いてたよな？」

いつもと違う、落ち着いた竜の空気に、少しどきっとする。

「・・・ごめん。聞いてた」

誤魔化しても意味がない事は分かってた。

「俺、みいの事好きだから」

そう言つて、竜が少し赤くなる。

私は・・・、何て答えていいか分からなくて、黙ってしまった。

何か言わなきゃ・・・！

一人で勝手に焦っている、

「じゃあ。それだけ言いたかっただけだから・・・」

竜が、言った。

そのまますぐに帰って行つた竜の後姿を見る事しか出来ない私は・・・。

何も言わず、動かず、暫くそのまま突っ立っていた。

「みい」

次の日、学校で・・・。

1人1人別々に行つた学校で。

朝、1番に私に声を掛けたのは・・・、愛美ちゃんだった。

「愛美ちゃん・・・」

「ちよつと・・・、いい？」

思わず、神妙に頷いた。

「私ね、竜の事・・・、好きだよ」

何の前触れもなく突然切り出す愛美ちゃん。

何も言えない……。私。

「ずっとずっと、好き」

いつもクールな愛美ちゃん。

今日は何だか……。可愛らしく見える。

これが……。恋？

私も空に……？

「竜がみいの事好きなのは、ずっと知ってたよ」

傷ついた風に言う愛美ちゃん。

一向に黙りこくる私。

「諦めようとした。だって私、年上だしね」

愛美ちゃんの長い髪が風に揺れる。

その横顔を見ながら、何も言えない私。

「でも……。無理だった。好きなの……。！竜の事が……。！」

そう言いながら、涙を堪える様な表情で振り返った愛美ちゃん。

「竜が好き」

最後にそう言った愛美ちゃんの顔は、今まで見た中のどこ表情より

も可愛かった。

元々美人な顔が涙で一層引き立っている様にさえ見えた。

最後まで何も言えなかった私を置いて、何かを決心した様に踵を返

す。

愛美ちゃんも竜も……。私は背中しか見れないね。

第9話 島民達の恋模様（後書き）

第9話、読んで下さってありがとうございます。

テスト期間なのに書きちゃいました（笑）

勉強どうすんだって感じですよね・・・。

頑張ります、はい。

短いですがこの辺で・・・。

ここまで読んで下さってありがとうございます。

よければ感想等聞かせて下さい。

第10話 旅人達の進む道（前書き）

―前回までのあらすじ―

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む美空と竜登、転校生の空。

すっかり打ち解けた3人。

でも、空が本土に帰る事に。

島では、何やら複雑な三角関係が始まって・・・!?

島の2人と本土の空。

そして、愛美・・・。

それぞれの物語が始まりました。

第10話 旅人達の進む道

空。

君がいなかった2ヶ月間に、私は色々な事を知ったよ。

竜の想い、愛美ちゃんの想い。

2人の恋はどうなっただろう？

お互いに報われない、辛い結果に終わりませんように……。

2人で歩める未来が、その先に待っていますように……。

この時は、本気でそう思ってた。

この先、竜がどうなるか。

私の気持ちはどうなるかも知らずに……。

1ヶ月。

1ヶ月経ったら帰って来ると……、確かに空はそう言った。

今日で1ヶ月が経って……、空はまだ、帰ってこない。

その事に寂しさを感じ……、一方で、空が帰ってこない事に安心している自分もいた。

私の気持ちは宙ぶらりんのまま……。

竜の気持ちにも応えられず、自分の気持ちも分からず……。

愛美ちゃんが、羨ましかった。

自分の気持ちをはつきり分かっていて、1度振られたのに頑張り続ける愛美ちゃんが……。

この後……、自分が愛美ちゃんを裏切る事になるなんて、思いも

せずに。

最終的に、人が進める道は、たった1つしかない。

だから、人は旅の途中に寄り道をするのだろう。

そして、寄り道の最後の最後に・・・、自分が進むべき道を見付ける。

そういうものなのだろう。

でも・・・、もし、見付けたその道に未来みきが無かったら？

人を傷つけ、自分も傷つき、そうやって手に入れた人との未来に、光が無かったら？

明るい未来を望むには、もう遅すぎる時が経っていたとしたら・・・？

その旅人達の進む道は・・・？

第10話 旅人達の進む道（後書き）

第10話、読んで下さってありがとうございます。

第10話記念(?)で、島の方のお俊い様な小説になってしまいました。

現在、島では1ヶ月が過ぎております。

島での2ヶ月を書き終わった後に、本土の方に移り、その先の展開・
・という流れを予定しています。

では……。

ここまで読んで下さってありがとうございます。
よければ感想等聞かせて下さい。

第11話 Back sky(前書き)

―前回までのあらすじ―

瀬戸内海に浮かぶ小さな小さな島。

その島に住む美空と竜登、転校生の空。

すっかり打ち解けた3人。

でも、空が本土に帰る事に。

島では、竜が美空に告白。

それは、複雑な三角関係の始まりの合図に……。

島の2人と本土の空。

そして、愛美……。

それぞれの物語が始まりました。

第11話 Back sky

竜と私は絶縁状態。

愛美ちゃんと竜は、お互いに傷つけ合ってる。

私と愛美ちゃんも、なんとなく気まずいままで……。

空が行ってから1ヶ月。

島での三角関係は、更に加速していました……。

朝の登校に、お昼のお弁当の時間。

竜と2人きりの時間はいっぱいある。

いや、あった。今までは。

「みい！」

昴が、家の前で私を呼ぶ。

朝、竜と一緒に登校しなくなって2週間。

最近は、1年生の皆と一緒に登校するようになっていた。

いつも家まで迎えに来てくれる、昴。

本名は昴流。

少し大人びた顔立ちで、いつも静かで優しい言葉を掛けてくれる、年下なのに何故か頼ってしまう男の子。

いつもは何となく学年毎に登校していた。

でも、私と竜が登校しなくなっただけからは、すぐに昴達1年生の皆と一緒に行くようになった。

私と昴は家が隣だから……。

本当は、優しい昴達に甘えているだけなんだろうけど……。

昴はあまり喋らない。

しばらく2人で歩いていると、

「昴（君）！ みいちゃん！」

昴と同じ1年生ーりいと波が見えた。

本名は凜と美波。

りいは白い肌に肩に少し架かるくらいの黒い髪の毛の、大人しくて物静かな女の子。

一方波は、小麦色の肌に短いショートカットの活発な女の子。

正反対の性格なのに、2人はとても仲が良い。

昴いわく、「俺は仲間はずれ」なんだって（笑）

朝の全校集会。

全校生徒8人（今は7人）で、週に1回色々な話を話す。

って言っても難しい事なんかじゃなく、只たんに意味の無いミーティングの様なものだ。

前回と今回、そのミーティングは過去最低の空気の中で行われている。た。

なにしろ7人中の3人（私、竜、愛美ちゃん）がまったく口を開かないからだ。

空がない今、2年生は全員喋っていない事になる。

その空気を何とかしようとして精一杯頑張ってくれているのが、りいと波。

まあそれも全て空振りに終わるけど……。

そんな中、

「みい」

静かに私に話しかけたのは・・・竜!?

「どうしたの?」

思わず上擦った声になったしまった事を、今更ながら後悔していた。

「くう、帰ってこないな・・・」

心配そうに言う竜は、私が空の事を好きだと思っているんだろうなあ・・・。

私は・・・、

好き・・・なのかなあ。

空の事・・・。

「そうだね。暫く帰ってこなかったりして(笑)」

冗談っぽく言ったつもりなのに、空は寂しそうに笑った。

竜は・・・、時々大人っぽく笑うよね。

最近気が付いたけど、それはいつも傷ついている時・・・。

ごめんね、竜。

「みい。俺は・・・、これからもみいと友達でいたい。もうあんな事言わないから」

竜が言ってくれた事は、私の最近の霧を晴らすには十分過ぎた。

「竜っ!」

思わず竜に抱きついて、

「あのね・・・っ、大好き」

そう言った。

竜は真っ赤になって、でも、

「俺も大好き」

そう言ってくれた。

嬉しくて、幸せで・・・。

そして、今始めて、ジュン空の霧が晴れている事に気が付いた。

お母さんの霧を・・・、空が。

さっきまでの霧を・・・、竜が。

空、竜、大好き。

空に特別な想いがあっても、それはきつと変わらない。

だから・・・、まだ、いいや。

きつと、いつか自分の空への気持ちに気が付く日が来るから・・・。

それまでは、この曖昧な関係を・・・。

そう想っていた私は・・・、バカだった。

そんなにのんびりしている暇は無かったのに。

第11話 Back sky(後書き)

第11話、読んで下さってありがとうございます。

「Back sky」の意味は、「心が戻る」という事です。
美空と竜の心の距離が戻っていく・・・というこの11話のタイトルとしていいかな?と違ってつけさせて頂きました。
分かりにくいタイトルですが、なんとか読んで頂きたいです。
すみません。

さて、島の方が終わりに近づいてきました。

あと3、4話で終わる予定です。

その後で本土、次の展開・・・という予定です。

では・・・。

ここまで読んで下さってありがとうございます。
よければ感想等聞かせて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1585w/>

pure sky

2011年12月3日12時57分発行